第Ⅱ部　両大戦間期の中央ヨーロッパ

ロカルノ体制批判とハンガリー地理学

――テレキ・パールの「ヨーロッパ」論から

辻河典子

はじめに

ハンガリーは第一次世界大戦で敗戦国となり、一九二〇年六月にトリアノン講和条約に調印した。同条約は大戦前のカルパチア盆地を中心とした同国領（歴史的領土）の約三分の二を周辺国に割譲することを規定し、約三〇〇万人のハンガリー語話者が周辺国に在住することになった。ヴェルサイユ体制は、第一次世界大戦の敗戦国に多大な負担を課すことでヨーロッパ諸国家間の政治的・経済的利害関係を戦勝国（特にフランス）に有利な形で定めた。第一次世界大戦後に中・東欧で成立した新興国家は、名目上は国民国家を掲げたが、各国の多数派ないし支配的な民族が主張する民族的居住空間は実際に規定された国境線を越えて広がっていた。

一九二五年一二月に正式に調印されたロカルノ条約は、独仏関係の緊張緩和とドイツの国際連盟への加盟を実現させ、ヨーロッパにおける国際政治情勢の相対的な安定化に成功した。しかし、フランスを中心とした同盟関係で担保されたこの安定は長く続かず、世界恐慌の影響により一九三〇年代初頭には動揺が始まった。そして一九三六年三月のナチス・ドイツのラインラント進駐によりロカルノ条約は破棄される。

戦間期を通じて、ハンガリー政府や各種社会組織は歴史的領土の完全な回復を模索した。ただしハンガリー政府は公式には平和的な解決を求めた（Zeidler 2007: 79）。ハンガリー近現代史研究者のゼイドレルは、完全な領土回復のための主張を、政治的境界線によるカルパチア盆地の地理的統一の解体が誤りであったことを示そうとした地理・経済的主張、ロシアとドイツに対抗するヨーロッパの勢力均衡の基礎としての存在を示そうとする戦略・安全保障的主張、九世紀末のカルパチア盆地の「征服」がハンガリー民族に歴史的権利を与えることを示そうとした歴史・文明的主張に大別した（Zeidler 2007: 71-73）。彼によれば、このなかでは党派的偏りが最も弱く論駁されにくい点で地理・経済的主張が最有力だった。

このゼイドレルの見解を踏まえると、戦間期ハンガリーにおける地理学と政治との関係の考察は重要である。すでに、ハイドゥーによる第一次世界大戦末期からトリアノン条約調印までの地理学者の活動を扱った論文（Hajdú 2000）や、戦間期ハンガリーの地理教育とナショナリズムの関係に注目したクラスナイの研究書（Krasznai 2012）などがある。本稿では、戦間期ハンガリーで首相を二度務めた地理学者のテレキ・パールに注目し、彼が政治地理学の立場からハンガリーの歴史的領土の正統性を主張することを通じて、ロカルノ体制をどのように批判したのかを考察する。

テレキの経歴は第Ⅰ章で述べるが、彼に関する先行研究は、政治家あるいは地理学者としての彼の業績に注目する傾向にある。戦間期ハンガリーの政治体制は第二次世界大戦後の社会主義期に「反革命体制」と解釈され、テレキはその戦間期の政治で主要な役割を担ったことから、特に政治家としての彼に関する研究は自殺に至る第二次政権への注目から始まった。一九六九年のティルコフスキによる一般向けの伝記は、彼の自殺に至った背景をその生涯も含めて探ろうとした（Tilkovsky 1969; Tilkovsky 1976）。彼は一九八九年にもテレキの自殺に関する著作を刊行した（Tilkovsky 1989）。

地理学者としての業績も含めてテレキ研究が幅広く発表されるようになったのは一九八〇年代末以降である。特に彼の自殺から五〇周年の一九九一年四月にはさまざまな記念企画が催された（Tilkovsky 1993: 553）。同年四月四日の記念集会とそれを受けた翌年一月九日の討論会では[*1]、テレキの政治家としての側面（特に第二次政権）と地理学者としての側面の両方から彼の再評価が行われた。二〇〇〇年前後からは戦間期ハンガリーの保守派政治研究の文脈でア

ブロンツィが彼に注目して伝記も刊行した（Ablonczy 2005; Ablonczy 2006）。地理学者としてのテレキについてはハイドゥーらの研究があり、二〇〇一年には「テレキ・パール回顧」と題してハンガリー地理学協会の『地理学紀要』で特集が組まれた（Nemerkényi 2001; Éva 2001; Kubassek 2001; Tilkovsky 2001; Fodor 2001; Teleki 2001; Hajdú 2001a; Timar 2001; Probáld 2001）。日本でも地理思想史の立場から水谷がテレキの地理学者と政治家としての業績を概観した（水谷 二〇〇二）。

先行研究では、一九二〇年代後半から一九三〇年代半ばのテレキ、すなわち彼が主に政治・経済地理学者として活動した時期の研究は決して多くない。しかし、第一次世界大戦の敗戦国からのヴェルサイユ体制ならびにそれを強化したロカルノ体制への批判を考察する上で、この時期のハンガリーにおける政治と地理学の両面で大きな役割を果たしたテレキに注目することは意義がある。本稿では、一九二九年九月のフランス外相ブリアンの国際連盟での提言に始まる「ヨーロッパ連邦」構想に対するテレキの批判を分析し、戦間期ハンガリーの政治地理学の立場からのロカルノ体制批判の特徴を明らかにする。

ジャルマティは、戦間期ハンガリーの政治思想における中央ヨーロッパ統合概念の変化を概観し、そのなかでテレキの主権の制限をめぐる議論に注目して（Teleki 1934a: 102-103）、そのブリアン批判にも言及した（Gyarmati 1999: 204）。だが、彼の議論には、テレキの批判の根本が政治地理学的な立場にもとづき、ブリアンの構想が国家主権の相互不可侵という国際連盟と同じ枠組み（新しい政策）をヨーロッパ（伝統的な政策が適っている地域）に適用しようとした点にあったことが見られない。

そこで、第Ⅱ章でブリアンの国際連盟での提言に始まる「ヨーロッパ連邦」構想とそれに対するハンガリー国会での反応を概観した後、第Ⅲ章で同構想へのテレキの批判の特徴を分析し、彼の主張を第一次世界大戦後のハンガリーの

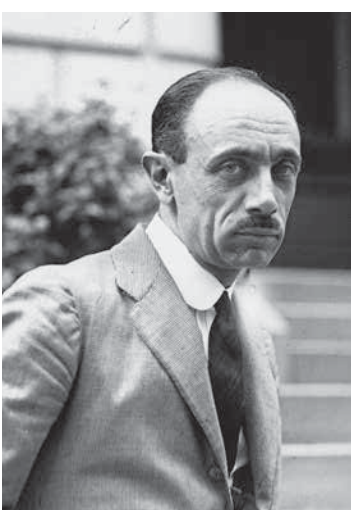

写真1 テレキ・パール（1921年9月3日）

（出所）アメリカ議会図書館 http://loc.gov/pictures/resource/npcc.04975/（January 15, 2015）

領土問題ならびにそれを承認するヴェルサイユ体制に対するハンガリー地理学界からの批判の一例として扱い、同時代のヨーロッパにおけるハンガリーの位置づけを考察する。

Ⅰ テレキ・パールの経歴

1 経歴

テレキはトランシルヴァニアを拠点とする貴族の子弟として一八七九年一一月にブダペシュトで生まれた。一八九七年にブダペシュト大学の法政治学部に進学したテレキは間もなく地理学に関心を持った。ラッツェルの政治地理学（人類地理学）の理論は当時のハンガリーの地理学者にも大きな影響を与えており、テレキが一九〇三年に政治学で提出した博士論文にもその影響が見られた（Ablonczy 2006: 10-13）。彼はブダペシュト大学の地理学講座の教授を務めた地質学者のローツィ・ラヨシュ、ならびにその同僚の地理学者チョルノキ・イェネーと親交を結んだ（Ablonczy 2006: 11）。一九〇四年には世紀転換期ブダペシュトで代表的な進歩派知識人が集った雑誌『二〇世紀』に寄稿した。同誌はハーバート・スペンサーの影響を受けて一九〇〇年に創刊され、スペンサーと同誌の母体となる社会科学協会の会長を務めたピクレル・ジュラにテレキは影響を受けていた（Ablonczy 2006: 14）。国会議員を短期間務めた後、彼は一九〇九年に日本の発見に関する地図学の歴史を扱った『日本列島の地図学史についての地図』を刊行して国内外で評判となり、一九一一年にはフランス地理学協会からジョマール賞を授与された。

テレキはローツィが会長を務めるハンガリー地理学協会の事務局長となり、指導部で重要な役割を果たすようになった。世紀転換期のハンガリーでは、ユーラシアの「ウラル＝アルタイ語諸族」の民族的・文化的統合を主張したツラニズムが知識人や芸術家、政治家からさまざまなレベルや動機から支持されるようになり、それらを結びつける目的で一九一〇年にツラン協会が設立された（Ablonczy 2006: 29）。テレキは同協会の副会長（後に会長）に選出され、機関誌『ツラン』の編集長も務めた。ただし財政難等で同協会の活動は順調ではなく（Ablonczy 2006: 30-31）、第一次世界大戦の開戦後に活動を停止した。

第一次世界大戦下、テレキは一九一七年までセルビアと

イタリアの戦線で従軍後、ハンガリーにいったん帰国する。しかし、一九一九年三月に同国でクン・ベーラらによる共産主義革命政権が成立すると国外に亡命し、保守派貴族のベトレン・イシュトヴァーンらによる「反ボリシェヴィキ委員会」に参加した。同委員会はセゲドに成立した反革命政権に合流し、テレキはこの反革命政権で外相となった。

第一次世界大戦末期から一九二〇年代初頭にかけてのテレキは、一九一〇年の国勢調査にもとづくハンガリー王国領内の民族分布を色分けで示した地図（通称「赤い地図 Carte Rouge/ Vörös térkép」）を一九一八年秋から講和会議のための資料として作成したほか、外相（一九二〇年四月～七月）と首相（一九二〇年七月～二一年四月）を務めた。彼の首相在任中にはユダヤ人の高等教育への進学を実質的に制限する通称「定数条項」法の成立や、一九二一年三月末から四月初めにかけてのハンガリー前国王カーロイ四世が帰国して復位を要求する事件が起きた。この事件に対応できなかったテレキは首相を辞任し、一九三〇年代後半までブダペシュト大学経済学部などで地理学を教える傍ら講演活動を行った。彼はハンガリーでのボーイスカウトの拡大にも尽力した。

一九三三年にドイツでナチス政権が成立すると、ヴェルサイユ体制の再編を求めるドイツにハンガリー政府は次第に接近した。一九三八年五月にイムレーディ・ベーラ政権で宗教・公教育相に就任したテレキは、第一次ウィーン裁定の交渉にも参加した。[*2] 同裁定はミュンヘン会談を受けてナチス・ドイツの影響下で行われ、ハンガリーはチェコスロヴァキアから南スロヴァキアの支配を回復した。イムレーディ政権は同年一二月に防共協定に加盟してドイツへの傾斜を強めるが、これに保守派政治家が反発し、同政権は一九三九年二月に退陣した。テレキはその後任として再び首相となるが、ハンガリーはさらにドイツの影響下に入った。彼の就任直後にはユダヤ人法が可決され、一九四〇年八月には第二次ウィーン裁定でハンガリーは北トランシルヴァニアの支配を回復した。一九四一年四月初旬、ドイツによるユーゴスラヴィア攻撃のためのハンガリー領内の通過許可ならびに北セルビアの支配回復を条件としたハンガリーのバルカン方面作戦への参加要請を受けたテレキは自殺した。その直後にハンガリーは第二次世界大戦に参戦した。

2 戦間期ハンガリー地理学とテレキ

近代地理学は一九世紀初頭のプロイセンでカール・リッ

ターとアレクサンデル・フォン・フンボルトによって基礎づけられ、ハンガリーにも同世紀後半に導入された。ハンガリー独自の地理学の発展は、一八七〇年にフンファルヴィ・ヤーノシュによるペシュト大学での地理学講座の設置に始まる（Tiner 2000: 346）。彼は一八七二年にハンガリー地理学協会も設立した。

世紀転換期には地質学者ローツィがブダペシュト大学の地理学講座の教授となり、同国での自然地理学と人文地理学の研究の進展に貢献した。彼の尽力で地理学や地質学での研究成果が中等・高等教育機関で教えられるようになり、その教育を受けた世代が一九〇〇年代初頭に登場した。地理学ではチョルノキ、プリンツ・ジュラ、テレキ、地質学ではパップ・カーロイらがおり、彼らは二〇世紀前半のハンガリーの地理学の発展に貢献した（Tiner 2000: 347）。

第一次世界大戦末期からトリアノン条約調印にかけて、ハンガリー地理学協会は同国の歴史的領土保持のために活動した。戦間期ハンガリーでは地理学が国民教育の教材としてさまざまに用いられ、高等教育レベルでは一九三〇年代から同国のそれまでの地理学の研究成果を明らかにしてまとめる文献（Cholnoky 1936-37など）が多数刊行された（Tiner 2000: 349）。また、第一次世界大戦後のハンガリーの歴史的領土の解体により、周辺国の帰属となった都市の大学の再編が行われ、地理学の高等教育と研究でもさまざまな変化が見られた（Tiner 2000: 347）。

一九二〇年にはテレキのイニシアティブでブダペシュト大学経済学部に経済地理学講座が設けられ、プリンツのいたペーチ大学と並んで同国での経済地理学の中心となった。この講座では、当時の民族的少数派の問題を政治地理学と地図学の方法論で解説した。彼は幅広い学術組織の活動の協力を得て、中央ヨーロッパ各国の経済地理学や人口地理学の関係から研究を行う社会誌学研究所（一九二四年）と国家学研究所（一九二六年）も設立した（Tiner 2000: 349）。彼の著作により、地理的環境の底流にある経済や社会を調査する手法がハンガリーでの地理学研究で一般的に受容されるようになった（Tiner 2000: 349）。

一九三三年三月にドイツでナチス政権が成立すると、ハンガリーは次第にドイツへ接近し、一九三九年二月には防共協定に参加した。一九三八年から一九四〇年にかけてハンガリーは旧領土の一部の支配を回復するが、一九四〇年一〇月に再設置されたコロジュヴァール大学経済学部には、歴史地理学、経済地理学、地質学の三つの研究所が置かれた（Tiner 2000: 349）。パーズマーニ・ペーテル大学

（旧ブダペシュト大学）では一九四〇年に人文地理学講座が開設され、一九四一年に自然地理学（物理地理学）講座をチョルノキから引き継いだブッラ・ベーラの活動は、第二次世界大戦後の自然地理学の発展を用意した（Tiner 2000: 349）。

一九四一年四月、テレキの自殺直後にハンガリーは第二次世界大戦に参戦した。彼のかつての教え子で同僚だったローナイ・アンドラーシュがパーズマーニ・ペーテル大学の経済地理学講座を引き継ぎ、「テレキ・パール学術研究所」と改名された国家学研究所の所長にも就任した。第二次世界大戦末期の同研究所は、政府から来たるべき講和会議への学術的準備が主要な課題として与えられていた（Tiner 2000: 349）。

Ⅱ ブリアンの「ヨーロッパ連邦」構想

1 国際連盟での提言

一九二九年九月、フランス外相アリスティード・ブリアンは国際連盟総会でヨーロッパにおける連邦的な秩序の形成を提言する演説を行った。彼は一九二〇年代後半に国際協調外交を推進し、一九二五年にはルール地方の占領からの撤退とロカルノ条約正式調印、一九二八年には不戦条約の締結を行った。彼はパン・ヨーロッパ運動の名誉総裁も務めた。

彼は、総会に参加していた各国の代表が彼の提言を公式に承認して次回の国際連盟総会までにその提言が実現可能であるかについて各国政府の検討に委ねることを求め（戸澤 二〇〇八：一〇八）、ヨーロッパの二六ヵ国の代表から委託を受けたフランス外務省は、一九三〇年五月に同事務総長アレクシ・レジェによるブリアンの提案を具体化した覚書を提出した（MAEF 1930）。

この覚書では、このヨーロッパ連合的な体制が国際連盟と密接に連携する必要があることが主張された（MAEF 1930: 10-12）。ただし、この覚書には、ヨーロッパ諸政府によって追求される連邦秩序を設けることに際して、いかなる場合でも、またいかなる程度でも、加盟国の主権に属する権限のいかなる部分にも影響を及ぼさないという留保が付けられていた（MAEF 1930: 12）。

その上で、覚書は四項目について提言した。第一点目が

「ヨーロッパの道徳的連合の原則を確立し、ならびにヨーロッパ諸国間で設けられる連帯の事業を厳かに行うための一般的な秩序についての協定の必要性」（MAEF 1930: 13）、第二点目が「ヨーロッパ連合（l'union européenne）に任務を遂行するために不可欠な諸機関を保証するための適切な仕組みの必要性」（MAEF 1930: 14-15）、第三点目が「ヨーロッパ委員会（Comité européen）の一般的な考えを決定し、またヨーロッパの組織化の計画を入念に作り上げるための検討作業において、指針となる不可欠な綱領を事前に定めておく必要性」（この第三点目は次にヨーロッパ各国が再び会合を開く際の判断に委ねられることが付記）（MAEF 1930: 16-17）、第四点目が「次回のヨーロッパ会議（Conférence européenne）あるいは将来的なヨーロッパ委員会（Comité européen）において実施する上でのあらゆる問題を検討することへの留保」（MAEF 1930: 18-19）である。これらを踏まえ、同覚書はヨーロッパでの平和の組織化に関するすべての問題を共同で規定し、ならびにヨーロッパ諸国の軍事力を合理的に調整するために、ヨーロッパ諸政府間での最高位の方法の連絡と確固たる連帯を効果的に実現することに取り組むことを主張した（MAEF 1930: 20）。

この覚書には連合体制に参加する各国の国家主権の不可侵性という留保が設けられており、この文書が国際連盟の諸条約（特にロカルノ条約）の遵守とヴェルサイユ体制を固定化しようとする内容であったことを意味した（戸澤・上原 二〇一四：六八）。すでに一九二九年一〇月にドイツ外相シュトレーゼマンが死去してドイツ外交では修正主義が台頭しており、世界恐慌の影響が広がるにつれて各国の保護主義も強まっていた。このため、ブリアンの提案はフランスの同盟国である小協商以外からは支持されないまま棚上げとなった（戸澤・上原 二〇一四：六八）。

2 ハンガリー国会での反応

ハンガリー国会でもブリアンの提言に始まる一連のフランス外交について意見が交わされた。当初は、例えば一九二九年一〇月二三日に与党議員で法務関係の議論で国際連盟へ派遣された経験もある外務担当官ラカトシュ・ジュラが、ブリアン提言におけるヨーロッパにおける法や経済の分野での統一の意義に言及した発言を行ったように（1927-XXIII: 22）、同提言に対する肯定的な評価も見られた。だが、ハンガリーが世界恐慌の影響を受けるなかで同国の経済問題

の議論と絡めて、こうした外交政策がフランスの中・東欧への影響力の強化を狙ったものであるという批判が示されるようになった。特にロジェの覚書が示されて間もない一九三〇年五月二六日の下院（代議院）では、このフランス外交への批判が相次いだ（1927-XXVIII: 319-347）。

一九三一年三月、ドイツとオーストリアの間で関税同盟協定が結ばれ、チェコスロヴァキアなどから強い反発を招いた。同年五月八日の下院で、当時のハンガリー首相兼外相カーロイ・ジュラは二国間の経済協定とブリアン提言の両立可能性を指摘した（1927-XXXVI: 33）。彼は世界恐慌の影響でヨーロッパ内に形成されつつあった経済ブロックからハンガリーが排除されかねないことへ懸念を示唆していた。

一九三二年三月、当時のフランス首相アンドレ・タルデューは通称「タルデュー・プラン」でドナウ諸国の連合を提案した。同年五月二七日の下院で、保守派のキリスト教経済党の有力議員トゥリ・ベーラは、「タルデュー・プラン」とはブリアン提言の対象がドナウ盆地へと縮小された形式、すなわちドナウ盆地で列強諸国が数十年間互いに進めてきた政策であると指摘し、同構想への慎重な対応を求めた（1931-VIII: 303）。

このように、ハンガリー国会におけるブリアン提言に始まる一連のフランス外交に関する議論では、世界恐慌下で苦境に陥った同国経済への対処も念頭に置きながら、同国のヨーロッパ内での孤立化を警戒する立場から語られる傾向にあった。

Ⅲ テレキのロカルノ体制批判

1 テレキの「ヨーロッパ」論とハンガリー

テレキは国際連盟を基盤としたヨーロッパでの連邦的な体制の構築に批判的であった。例えば一九三一年三月刊行の『ハンガリー評論』に掲載された「ヨーロッパの問題」で、彼はアメリカ合衆国の状況と比較するとヨーロッパ各国は自然景観、伝統、言語が異なるため連邦制的な秩序にはそぐわないこと、ならびに歴史が繰り返されることはないという考え方から同じく連邦制を採るスイスの例に倣うこともできない旨を主張した（Teleki 1934b: 102-103）。本章では、ブリアンの提言後の一九二九年に彼がヴロツワフ

大学で行った時事評論的な講演「政治地理学の観点における現在の国際的な政治諸問題」[*3]の一部を主に参照したい。

この講演で、彼は時事的な政治問題を論評し、そのなかで国際連盟、ヨーロッパ、（講和条約の）修正、（民族的）少数派についても扱った。彼は国際連盟の弱点を戦勝国によって創設されたという成立過程と第一次世界大戦後の各国が排他的になっている状況で形成されたことに見出した（Teleki 1931: 12）。この箇所は一九三四年版の講演録で「戦争［引用者注―第一次世界大戦］と戦勝国が国際連盟をもたらした――国際連盟は今も戦勝国の連盟であり、その精神によってむしろ適切な国際連盟の形成の障害である。どのような組織がそれでもすでに存在しようとも、そして会うことと話し合うことの可能性とある程度の形式ならびに構造がみられ、それが疑うことなく用件を容易にすることが事実であろうとも」（Teleki 1934a: 81）と書き直されている。いずれにせよ、国際連盟が第一次世界大戦の戦勝国の利益を固定化させる役割を果たしていることをテレキは批判した。そして、国際連盟の思想によるヨーロッパ諸国の会合がブリアンの提言以後に特に好意的な考えだと見られるようになっていることに対して「国際連盟とヨーロッパ諸国の共同の間には本質的な違いがある」（Teleki 1934a: 81）[*4]と述べ、ヨーロッパ諸国が伝統を共有する生活共同体として発展してきたことを解説しながら「ヨーロッパの未来を国際連盟の妥協に従って形成された委員会によって解決することはできない」（Teleki 1934a: 83-84）と主張し、ブリアンの提言を明確に否定した。[*5]

その上で、彼はヨーロッパの再建が「修正（revisió）」によってのみ解決可能だと指摘した。ただし、この修正とは単に敗戦国の利益になるものでも、それらの国々の問題でもなかった。また、戦前の状態に単純に戻すことができないのも明らかであった。彼は「この修正は明らかにヨーロッパ諸国家の国家間の共同行動の新しい規則と共同行動のより密接でより安定した手段によるものである」（Teleki 1934a: 84）と述べ、新しい国際秩序の形成を主張した。テレキは「私は『ヨーロッパ国際連盟』の名を使いたくない。なぜなら、この名はジュネーブの国際連盟とブリアンの計画がすでに利用しており、この方法、すなわち国際連盟の『小委員会』の方法では目標に至らないか、少なくとも大きな回り道になるだけであろうためだ」（Teleki 1934a: 84）と述べたように、国際連盟を基盤とした国際協調外交が非現実的であると批判的であった。しかし、彼は「修正は明らかに共同体に超国家的な権力がある組織に

よってなされるものである。なぜなら、修正は諸国家の主権の制限なしに実行できない、少なくともこの制限によって明らかであるような合意なしには実行できない」（Teleki 1934a: 84）とも主張しており、諸国家の主権を制限できるような超国家的な国際機関の設立そのものには賛同し、それを通じたヨーロッパの国際的な枠組みの再編を求めた。

第一次世界大戦後のヨーロッパ再編と関連して、テレキは（民族的）少数派についても論評した。彼は第一次世界大戦までの少数派を「伝統的な少数派」と「自発的な少数派」に分類した。前者は、少数派の特徴・言語・習慣・生活様式が奪われることなしに多数派の人民（nép）と何世紀にもわたって共存してきた人々のことで、歴史的ハンガリーでのスロヴァキア人（tót）のほか、ブルトン人やカタロニア人、アルザス＝ロレーヌ地方の人々を例に挙げた。後者は強制移住ではない形で移住した人々のことで、ハンガリーではドイツ人を例に挙げた。彼によれば、政治的ならびに法的に両者に関する国際的な規定の必要性は認識されていなかった（Teleki 1934a: 85）[*6]。一方、彼は第一次世界大戦後のヨーロッパの多くで新たに「強制された少数派（kényszerkisebbségek）」が創出されて各国内で法的に困難な立場に置かれていることを指摘し、彼らへの法的保護の必要性を主張した（Teleki 1934a: 85）。テレキは「ヨーロッパを少数派がいないようにすることはできない」と述べ、少数派の立場を完全に十分なものとする体制なしではヨーロッパの運命や未来は決定できないが、少数派の問題をこれまでの展開と諸原因に関する知識と尊重なしに決着することもできないと主張した（Teleki 1934a: 85-86）。

そして国際連盟、ヨーロッパ、修正、少数派という以上に挙げた四点から、テレキは世界の各所とそこに住む諸人民、ならびにそこで形成された国家間の妥協の必要性、同じくヨーロッパの生活共同体の結束（tömörülés）とは、人類の歴史とそれによる地表での生活の統合的な過程の自然な現象で、その過程には人間の歴史の一つの要素があり、環境を形成する要素としての人間の支配が発展する時代があると総括し、これらの現象が当時起きる必要があったと主張した（Teleki 1934a: 86）。彼は、修正の決定と実行はこの歴史的経過の理性的な結果であり、これゆえに実現されねばならないが、ヨーロッパの人民共同体には少数派が生活する諸組織があるので、少数派問題の決着も含まれていなければならないと述べた（Teleki 1934a: 86）。

トリアノン条約によるハンガリーの領土解体を念頭に置いてこれらのテレキの主張を考察すると、歴史的に形成さ

れてきた生活共同体たるヨーロッパに属するハンガリー王国の領域が同条約によって分断された状況を批判し、ハンガリー国境外のハンガリー系住民に対する法的保護を訴えようとする彼の意向が読み取れる。

一九三〇年前後のテレキがヨーロッパのなかでハンガリーをどのように位置づけていたのかという点については、一九三〇年五月にミュンヘン芸術家協会とドイツ＝ハンガリー協会、ミュンヘン地理学協会の招きを受けて行った講演の内容も参照したい。同講演で、彼はヨーロッパにおける経済発展の背景を人々の居住地域や気候、土地と人の結びつきなどから解説しながら、第一次世界大戦後のハンガリーが経済的に困難な状況に直面していることを説明した。[*7] そのなかで、彼はハンガリー王国の成立に関して「ドナウ川中流の盆地の特徴的な状況は、大筋で人間の生存圏（menschlicher Lebensraum）として盆地の運命を予め示していた。その運命はそれぞれのヨーロッパの発展に参加して経験しなければならない。だが、それは辺境地域として、かなり後にはヨーロッパの核となる地域として、そして微妙に異なる別様の形式を取った地域的特性の結果としてのものである」（Teleki 1930: 10）と述べた。この主張からは、彼がハンガリーの領土的一体性の回復を求めていたことが読み取れる。先述のように地理・経済面からのハンガリーの領土修正要求は最も説得力のある手法だった（Zeidler 2007: 71-72）。

また、「生存圏」という用語に加えて、王国領の地理的特性が王国民（主に想定されているのはハンガリー民族）の居住空間やその歴史に影響を及ぼすという考え方には地政学との類似性が見られた。ただし、テレキ自身は地政学に批判的であった。この点についても次節で簡単に述べておきたい。

2 地政学との関係

一九世紀末から二〇世紀前半の地理学、特に政治地理学の分野では、地政学が国際的に注目された。政治地理学とは、ある国家の政治と地理的な要因との関連について当時の地理学で主流だった環境決定論的な発想、すなわち土地や自然が人間の生活に及ぼす影響から考察する分野であった。ドイツの動物学者・地理学者フリードリヒ・ラッツェルの『政治地理学』（一八九七年）が重要な著作である。彼はすでに『人類地理学』（Ratzel 1882; Ratzel 1891）で、ダーウィンならびに社会ダーウィニズム的な経済思想を提

唱したアルベルト・E・F・シェフレの影響から「空間のための戦い」という概念を示していた（Weikart 1993: 486）。このラッツェルの理論を背景に、一九世紀末にスウェーデンの政治学者ルドルフ・チェレーンが領土・民族と一体化した有機体として国家を理解する地政学の概念を創出した。この理論はイギリスの地理学者・国会議員のハルフォード・J・マッキンダーや、ドイツの軍人出身の地理学者カール・ハウスホーファーによって体系化され、一九三〇年代以降にはナチス・ドイツの東方侵略の正当化に利用された。

ハンガリーの地理学にもラッツェルの著作は大きな影響をもたらしたが、戦間期にはすでに批判を受けていた（Hajdú 1998: 96-99）。ハンガリー地理学協会の『地理学紀要』でもドイツ語圏で刊行された地政学関連の著作が紹介されたが（Teleki 1929: 46など）、これらは外国での研究動向の紹介であった。当時のハンガリー地理学では地政学と距離を置きつつも、地政学と理念的には類似する環境決定論が議論されていた（Hajdú 2001b: 66-73）。

テレキも、例えば先述のヴロツワフ大学での講演「政治地理学の観点における現在の国際的な政治諸問題」で地理学の一分野として地政学を捉えることに否定的な見解を示し、政治地理学を支持した。彼は地政学の出発点たるラッツェルの政治地理学の理論が学術的な批判に耐えられないことを指摘した（Teleki 1934a: 72）。彼は、地政学が第一次世界大戦後に隆盛になったのは政治諸問題の拡大とさまざまな地域の諸問題が組み合わさることで政治における地理学的状況が考慮されるようになったことから当然だったと認めながらも、地政学とは依然としてまず政治的なものであり、政治的事件の一つの説明であると見なした（Teleki 1934a: 72）。そして、地政学という語の当時の用法にもとづいて、彼は地政学が学術性を欠く政治的な概念だと主張した（Teleki 1934a: 72）。

テレキは、政治およびそれに関連する経済生活に対する自然環境条件の有効性や影響と、そこでの自然環境条件への人間からの影響を考察することが、固有で特に社会化する存在たる人間の役割に注目した分野である普遍的で統合的な地理学としての政治地理学の課題であると述べた（Teleki 1934a: 76）。この環境決定論的な立場ゆえ、彼の思想が地政学に立脚すると受け止める者もいた（Palotás 1943: 109など）。

おわりに

以上、一九三〇年前後のテレキによるヨーロッパ政治の批判を概観した。彼は国際連盟を基盤とした政治枠組み（すなわちロカルノ体制）に否定的で、新たな枠組みを構築する必要があると考えていた。彼はその枠組みを考案する上でハンガリーの領土的一体性を主張し、その際に同国が歴史的にヨーロッパの一員であり続けてきたことを強調した。ただし、彼自身は地政学に批判的だった。

テレキはヨーロッパを世界の他地域とは異なる独自の伝統ある共同体として優位なものと見なしただけでなくハンガリーはヨーロッパの一員であることを強調しており、彼のハンガリー国家ならびにハンガリー民族への選民的な発想を読み取ることができる。先のゼイドレルが指摘した領土回復のための主張の歴史・文明的主張、すなわち周辺の諸民族と比較した社会的・文化的優越を主張してハンガリーを西欧に対するキリスト教世界の東の砦と位置づけた主張と重なる。

ウォルフが一八世紀の啓蒙思想家が「文明」を指標として「後進的」な東欧を認識し、その東欧と西欧を区別する地理認識が現代にも引き継がれていることを指摘したように（Wolff 1994）、「東欧」とは地理的な位置関係だけでなく、文明空間としての「ヨーロッパ」ないし「西欧」と対比されて「後進的」な地域だという価値判断が含まれていた。ハンガリーは近代以来「ヨーロッパ」から「他者化」されてきた存在であり、かつ戦間期には第一次世界大戦の敗戦国として経済や社会の面で負担を課せられていた。テレキは二重の意味で「他者化」された存在だった戦間期ハンガリーを「ヨーロッパ」の一員であると位置づけながらヨーロッパの再編を訴えたのである。

◉注

＊1　両集会の内容はCsicsery-Rónay & Vigh（1992）に収録。

＊2　チェコスロヴァキア解体に伴い、ハンガリーは一九三九年三月にルテニア地方（現ウクライナ・ザカルパッチャ州）の支配も回復した。

＊3　この講演録は一九三四年刊行の著作集収録時の加筆・修正によって彼の主張がより明確になっているため、本稿では主に一九三四年版（Teleki 1934a）を参照し、適宜一九三一年版（Teleki 1931）を参照する。

＊4　彼は他の論考で両者の差異について、国際連盟が二〇世紀に新たに登場した諸問題に取り組むような伝統を欠いた妥

協的な組織であるのに対し、ヨーロッパを諸人民とその地での生活によって歴史的に発展してきた一つの生活統合体（életegység）として理解し、ヨーロッパの再建は妥協的な組織ではなく諸人民と彼らの指導者の意志によって可能となるのだと主張した（Teleki 1934b: 103-104）。

＊5　彼は「ヨーロッパの問題」内で、ブリアンの構想はヨーロッパ政治・世論の一般的な心理と「講和条約が作成された状況を、とにかく現状を維持しようとするフランスの試み」が生み出し、さらにフランス内政の歓心を買おうとした内容であったと批判した（Teleki 1934b: 106）。

＊6　一九三一年版では「法的に」のみ（Teleki 1931: 17）。

＊7　例えば「我が国の状況の困難さは、ヨーロッパならびに全世界の経済発展の自然な組織的進行がちょうど我が国固有の経済発展に特に強く変更させるような大きな影響を与え、そして与えねばならないときに、我々にこの過酷な一撃［引用者注―第一次世界大戦によって領土と人口の大半が失われ、民族的ハンガリー人の四分の一以上が他国の支配下に置かれていること］が当てられたことによって高められている」と解説した（Teleki 1930: 13）。

◉参考文献

戸澤英典（二〇〇八）「ブリアンの国際連盟総会における『ヨーロッパ連邦的な秩序樹立』演説（一九二九）」遠藤乾編『原典ヨーロッパ統合史――史料と解説』名古屋大学出版会、一〇四―一〇八頁。

戸澤英典・上原良子（二〇一四）「ヨーロッパ統合の胎動――戦間期広域秩序論から戦後構想へ」遠藤乾編『ヨーロッパ統合史（増補版）』名古屋大学出版会、五四―九三頁。

水谷剛（二〇〇二）「ハンガリーの地理学者・首相テレキ・パールに関する研究ノート」『駒澤地理』三八号、六九―八六頁。

Ablonczy, Balázs (2005) *Teleki Pál*, Budapest: Osiris.

Ablonczy, Balázs (2006) *Pál Teleki (1874-1941): The Life of a Controversial Hungarian Politician*, New York: Columbia University Press.

Az 1927. évi január hó 25-ére hirdetett Országgűlés képviselőházának naplója, XXIII. kötet (1929)〔本文中では1927-XXIII〕Budapest: Athenaeum.

Az 1927. évi január hó 25-ére hirdetett Országgűlés képviselőházának naplója, XXVIII. kötet (1930)〔本文中では1927-XXVIII〕Budapest: Athenaeum.

Az 1927. évi január hó 25-ére hirdetett Országgűlés képviselőházának naplója, XXXVI. kötet (1931)〔本文中では1927-XXXVI〕Budapest: Athenaeum.

Az 1931. évi július hó 18-ára hirdetett Országgűlés képviselőházának naplója, VIII. kötet (1932)〔本文中では1931-VIII〕Budapest: Athenaeum.

Cholnoky, Jenő (1936-37) *A Föld és élete: világrészek, országok, emberek I-VI*, Budapest: Franklin-Társulat.

Csicsery-Rónay István and Vigh Károly (eds.) (1992) *Teleki Pál és kora: A Teleki Pál emlékév előadásai*, Budapest:

Occidental Press.

Éva, Penney (2001) "Gróf Tekeli Pál: a földrajztudós és államférfi életútja (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 3-6.

Fodor, Ferenc (2001) "Teleki Pál, a tudós (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 21-44.

Gyarmati, Görgy (1999) "Conceptual Changes on Central European Integration in Hungarian Political Thinking, 1920-1948," in: Romsics, Ignác and Király Béla K. (eds.), *Geopolitics in the Danube Region: Hungarian Reconciliation Efforts, 1848-1998*, Budapest: Central European University Press, pp.201-226.

Hajdú, Zoltán (1998) "Friedrich Ratzel hatása a magyar földrajztudományban," *Tér és Társadalom* 3: 93-104.

Hajdú, Zoltán (2000) "A magyar földrajztudomány és a trianoni békeszerződés: 1918-1920," *Kisebbségkutatás* 9 (2) : 224-233.

Hajdú, Zoltán (2001a) "Teleki Pál tájelméleti munkássága (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 51-64.

Hajdú, Zoltán (2001b) *Magyarország közigazgatási földrajza*, Budapest-Pécs: Dialóg Campus.

Krasznai, Zoltán (2012) *Földrajztudomány, oktatás és propaganda: A nemzeti terület representációja a két világháború közötti Magyarországon*, Pécs: Publikon.

Kubassek, Jáanos (2001) "Földrajztudós és államférfi—Laudáció Teleki Pál magyar örökség díjjal való elismerése alkalmából (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 7-12.

Ministere d'Affaires Etrangere de France〔外交部 MAEF〕(1930) II. Mémorandum sur l'organisation d'un régime d'union fédérale européenne (Archives de la Société des Nations/ Paris, le 1er mai 1930), R 3589 (50/19816/19816).

Nemerkényi, Antal (2001) "Teleki Pál emlékezete—A közlemények második Teleki Pál száma elé," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 1-2.

Palotás, Zoltán (1943) "A geopolitika mint államtudomány," *Hitel* 2: 98-109.

Pétervári, László (összeállította) (2001) "Teleki Pál a Földrajzi Közlemények hasábjain—Bibliográfia (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 85-88.

Probáld, Ferenc (2001) "Egy Teleki-tanítvány ellentmonásos életútja (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 81-84.

Ratzel, Friedrich (1882) *Anthropo-geographie oder Gründzüge der Anwendung der Erdkunde auf die Geschichte*, Stuttgart: J. Engelhorn.

Ratzel, Friedrich (1891) *Anthropogeographie, Zweiter Teil: Die Geographische Verbreitung des Menschen*, Stuttgart: J. Engelhorn.

Teleki, Pál (1929) "Haushofer–Obst–Lautensach–Maul: Bausteine zur Geopolitik. Berlin, 1928," *Földrajzi Közlemény* 57 (1-5) : 46.

Teleki, Pál (1930) *Ungarns Wirtschaftslage: Die Vielseitigkeit ihrer Schwierigkeiten*, München: Südost.

Teleki, Pál (1931) *Időszerű nemzetközi politikai kérdések a politikai földrajz megvilágításában*, Budapest: Királyi Magyar Egyetemi.

Teleki, Pál (1934a) "Időszerű nemzetközi politikai kérdések a politikai földrajz megvilágításában," *Európáról és Magyarországról*, Budapest: Athenaeum, pp.72-94.

Teleki, Pál (1934b) "Európa problémája," *Európáról és Magyarországról*, Budapest: Athenaeum, pp.95-108. (初出は *Magyar Szemle*, 1931. XI. köt. 3 (43): 209-220.)

Teleki, Pál (2001) "A tájról és a földrajzról (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 45-50.

Tilkovsky, Loránt (1969) *Teleki Pál: legenda és valóság*, Budapest: Kossuth.

Tilkovsky, Loránt (1976) *Pál Teleki: A Bibliographical Sketch*, Budapest: Akadémiai.

Tilkovsky, Loránt (1989) *Teleki Pál titkozatos halála*, Budapest: Helikon.

Tilkovsky, Loránt (1993) [Book Review] Csicsery-Rónay & Vigh (1992), *Századok* 127 (34) : 552-555.

Tilkovsky, Lórant (2001) "Teleki Pál—ahogy a történész látja (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 13-20.

Timar, Edit (2001) "Teleki Pál egy kevéssé ismert munkája, az ún. Monszuli jelentés (Teleki Pál emlékezete)," *Földrajzi Közlemények* 125 (49) (1-2) : 65-80.

Tiner, Tibor (2000) "A földrajztudomány 1945-ig," in: Kollega Tarsoly István (ed.), *Magyarország a XX. században IV. kötet: Tudomány 1. Műszaki és természettudományok*, Szekszárd: Babits Kiadó, 2000, pp.346-350, http://mek. oszk. hu/02100/02185/html/822. html (December 31, 2014).

Weikart, Richard (1993) "The Origins of Social Darwinism in Germany, 1859-1895," *Journal of the History of Ideas* 54 (3) : 469-488.

Wolff, Larry (1994) *Inventing Eastern Europe: The Map of Civilization on the Mind of the Enlightenment*, Stanford: Stanford University Press.

Zeidler, Miklós (2007) *Ideas on Territorial Revision in Hungary 1920-1945*, New York: Columbia University Press.

◉著者紹介◉

①氏名……辻河典子（つじかわ・のりこ）。

②所属・職名……近畿大学文芸学部文化・歴史学科・特任講師。

③生年・出身地……一九八二年、大阪府生まれ。

④専門分野・地域……歴史学と地域研究。中央ヨーロッパ（特にハンガリー）を主な対象とする。

⑤学歴……東京大学教養学部、東京大学大学院総合文化研究科修士課程、同博士課程、同修士（学術）。

⑥職歴……日本学術振興会特別研究員（三〇歳、二年）、城西大学非常勤講師（三一歳、一年弱）。

⑦現地滞在経験……ハンガリー・ブダペシュト（二五歳、二年、留学）。

⑧研究手法……文献・史料調査。

⑨所属学会……東欧史研究会、史学会、日本西洋史学会。

⑩研究上の画期……一九九〇年の東西ドイツ統一。当時は事情をまったく理解せずにニュースを見ていたが、後にその歴史的意義を知り、いわゆる「東欧」地域に関心を持つようになった。

⑪推薦図書……ナイジェル・ルイス『ペイパーチェイス』（中野圭二訳、白水社、一九八六年）。第二次世界大戦中にベルリンのプロイセン国立図書館から下シレジアの修道院へ疎開した所蔵品のうち、モーツァルトやベートーヴェンら著名な作曲家の自筆楽譜の所在の解明の試みを中心に扱ったノンフィクション。第二次世界大戦後に国境線が大きく変動したポーランドとドイツの現代史だけでなく、国家による文化遺産の所有の意味についても貴重な示唆を与えてくれる。